

明治のキリスト者

筑波大学教授

大濱徹也

はじめに

キリスト教がそれなりに許されて百二十年目ということで、「明治のキリスト者」という問題について少しお話しをさせていただきます。キリスト教界と神社界というものを見ていますと、十分な対話がなされていないように思います。その一つには、現在のキリスト教界自体が「日本の宗教」、「日本の神社」というものについて無知であるという問題があります。しかしながら、明治維新、ペルリの開国によつて宣教師たちがやってきて、欧米の文化にふれ、キリスト教にふれるなかで入信したキリスト者には、彼ら自身、自分の根生いの心なり、根生いの文化というものを非常に真摯に直視するなかで、自らの信仰世界を切り開いてきていたことがわかります。今日はそうした意味で明治のキリスト者の問題について、わずかですが、ご紹介したいと思います。

明治天皇の死

こちらのご祭神である明治天皇が病気になって重態であるという報道は、明治四十五年七月二十一日に「聖上陛下

御重態」との号外が出て、人々を驚かせます。そして、七月三十日の午前〇時四十三分に明治天皇は崩御されました。その崩御の知らせを当時の人たちはどのように受けとめたのでしょうか。たとえば青森県の陸奥で出ています『陸奥日報』という新聞を紹介しますと、「天柱折れて四海暗黒。吾人臣民只涙哭の外なきのみ噫万事休す」と、その悲しみを報じております。こういうものが当時の一般の新聞の論調でありました。非常に強い、ある時代が失われたという思いをもっていたというのが、明治天皇の死をめぐる日本の人心だったと思います。

ちょうど夏でしたので、日光で避暑をしていた内村鑑三は、天皇が亡くなった翌日の大正元年七月三十一日付で、当時東北帝国大学農科大学校、後の北海道帝国大学（現北海道大学）の教授であった宮部金吾という内村の最も親しい友人にあてた手紙の中で、「天皇陛下の崩御は哀悼に堪へません。自分の父を喪ひしが如くに感じます。明治時代は其終りに来つつあります。昼と称ばれる中に働かうではありませんか」と記していますように、新聞論調と同じような時代喪失感に強くとらわれております。そして、「自分の父を喪ひしが如く」というかたちで明治の終わりというものを内村は痛感しています。

このような思いは、最も親しい友人であった宮部だけにではなくて、『聖書之研究』という内村が出している雑誌の大正元年八月号に、「闇中の消息」と題して天皇の死にふれて、自からの思いを内村のもとにいる弟子、『聖書之研究』の購読者にあてたメッセージとしてのべています。

「申すまでもなく明治天皇陛下の崩御は譬へやうなき悲痛であります。私共は之に由て天地が覆へりしやうに感じます。聖書に謂ふ所の「日も月も暗くなり、星その光明を失ふ」（ヨエル書三の十五）とは斯かる状を云ふのであらふと思ひます。私共は今更らながらに此世の頼みなきを感じます。この悲痛に蔽はれて休暇も休暇になりません。唯夢を辿るが如き心地が致しまして、海も山も私共に平康を与へません。唯此上は死も敗壞も何の関係なき永久の真理を追求するまでのごとであります」。

明治天皇の崩御で時代の一つの崩壊と喪失を実感した内村は、改めて真理の追求というかたちで、イエスの贖罪の信仰のなかで自分自身の新しい道を確立する宣言をしているということが言えます。

これは内村だけではなくて、明治キリスト者が、明治天皇が重病にかかり、そして崩御するという期間のなかに、どのような軌跡をとっているかというものを見てみますと、共通したものがありません。

明治天皇が重病であるという知らせを受けた日本のキリスト教界は、陛下御病氣平癒の祈願の全国祈禱会というものを呼びかけております。その呼び掛けの中心になったのは、現在の麻布学園の実地的な創立者になった江原素六という衆議院議員をやり議長をやった人物。あるいは、当時の教界を代表する平岩愼保をはじめとした人物。また、日露戦争のときにはロシアのスパイの巢窟というかたちでさまざまな迫害を受けた神田にあるニコライ堂、ハリストス正教会のセルギー主教をはじめとして、キリスト教界の各派の代表者たちが病氣平癒祈願というものを各々の教会で催しております。

このことはどういうことであるかという点、実は明治のキリスト者にとって、当時一般に帝室と言われていた皇室の動きには大変な親近感をもっていったということが言えます。ある意味では帝室制度というかたちで明治になって成り立ってきた日本の立憲君主制というものに最もなじみ深かったのは、キリスト教界、日本のキリスト者たちでした。これは、後に天皇制というかたちで論じられてくることによって、かなり明治という時代がもっていた帝室あるいは皇室のイメージがちぐはぐになってきますが、明治のクリスチャンたちはそういう部分においては帝室制度あるいは皇室に対する親近感をもっていったことが言えます。

たとえば明治維新政府は五節句を廃止して、国家祝祭日を決めますが、キリスト教界ではそのとき天長節と紀元節を非常に大事にします。当時ありました神社とか寺というものと比べてみると、キリスト教会が最も忠実に天長節礼拝、あるいは紀元節礼拝を守っております。それは、明治の新しい国家祝祭日というのが、実は西欧の君主国におけ

る国家祝祭日にならうかたちでつくられた制度であり、そのことがヨーロッパの文化的な香りのなかで育てられたキリスト教会あるいはクリスチャンなり宣教師たちにとつてみれば、ごく自然の営みであったことによります。

逆に、五節句という従来の慣習的なものを否定されたことによつて、寺にしても神社にしてもきわめて違和感をもつていたのでないでしょうか。そういうことをふまえてみるならば、明治末年の天皇の重態から崩御までの期間を、明治のキリスト教界、キリスト者は、何人よりも自らの問題として心痛し平癒を祈るということも当然出てきたわけ
です。

明治天皇の葬儀は九月十三日に青山練兵場で行われるわけですが、その前日に日本のキリスト教界を代表する人物の一人である植村正久、彼のよつた教会は現在飯田橋のところにある富士見町教会ですが、彼は「明治天皇の輜車を奉送す」という記事を、彼が出している『福音新報』という新聞に載せております。

「国民は明夕を以て青山の齋場に、明治天皇の御遺骸を奉送せんとす。基督者は当日其の教会堂に参集して之が為に礼拝を行ひ、皇室の為国民の為に祈りを捧ぐることなるべし。明治天皇は英雄にあらず。英雄より更に好き善人に在らしき。正直謹厳にして、敬神の心深く、国民の君主にして責任を重んじ、之がために献身犠牲の記憶を遺されしこと頗る多し。維新の大業、憲政の樹立、光榮ある四十五年間の政。国勢前古無比の発達。将来益す隆んるべき進運。忠良なる臣民の最も深厚なる敬愛。何れが其の冠冕の宝玉として輝かざるものあらんや」という言い方で、やはり明治天皇の大喪に対する気持ちを述べております。

それは明治天皇が日本を立憲君主国にしていくことをとおし、民族独立国家日本をつくつたという思いと一体になるなかにおいて、明治のキリスト教界の指導者が言つただけではなく、そういう思いが当時のキリスト者全体にあつた思ひだということです。

文野の闘争——啓蒙の時代

その背景にあるものは何かというと、明治という時代は文明と進歩を日本にもたらす時代としてあり、また、そのような意味において明治政府が行ったさまざまな文明化するための諸改革というものは、当時のキリスト者にとってみるならば、彼らが思っていた国家形成の歩みとある部分では一致していたことによります。

では、いったい明治という時代はいまどのようなようにとらえられるのでしょうか。明治期のものを見ますと、「文野の闘争」という言葉がさかんにつかわれております。「文野の闘争」というのは文明と野蛮の闘争ということです。そして、ある意味でいえば、明治というのは一つの啓蒙の時代であったと位置づけることが出来ます。キリスト教は、そうした意味でいえば、「文明の宗教」としてとらえられております。

ちなみに文明とは何であるかということ、文明化は進歩への道であり、時間的にいうならば、イギリスに代表されるようなヨーロッパの歴史段階が一つの文明の段階です。空間的にいえば、西ヨーロッパを中心とする地域が文明の地域であり、非西欧の地域、アジア・アフリカは野蛮という概念のなかで多くの認識構造がとられています。実は日本の知識人の認識構造には、この文明と進歩の論理が、近代化の論理としていまだに根強くあると見ていいだろうと思います。

それだけに、日本はどのような歴史段階であり、どのようなかたちで日本の文明が目指さるべきか。野蛮から文明、あるいは未開から開化への問題が常に意識され、日本の方向としてとらえられてきます。そうしたなかで最も苦闘した一人の思想家は福沢諭吉ではないかと思えます。彼は日本をアジア・アフリカというなかで、野蛮ではない、かといってヨーロッパ的文明ではないというときに、未開と開化の間であるということ、「半開」という概念で日本を位置づけたわけです。

福沢は、こうした思想の営みで苦しんでいただけに、キリスト教にふれるなかで文明の知識を得ようとするクリスチャンの青年たちに対して最も痛烈な言葉を投げつけられます。クリスチャンになる青年たちは「字を知る乞食」だと揶揄しております。教会の宣教師のもとに英語やなにかを学びに行く、英語を手に入れることは、社会に出るうえで最も有利なステータスを築く、そういうことで宣教師のもとに行くのは、信仰ではなくて、英語の知識、文明の知識を身につけに行くんだから、あの連中は「字を知る乞食」だという言い方で批判したわけです。

たしかに、日本のキリスト者の体質のなかにはかなりの部分、「字を知る乞食」的な部分があつたのも事実であります。それは開港場に見られるような文明的雰囲気、讚美歌をはじめとする西洋的な雰囲気としての文明にふれることをよるこびとしたこともその一つです。

また、当時のミッションスクール、たとえば現在でいいますと東京六本木の鳥居坂にある東洋英和女学校は、ある段階のときは華族に代表される上流階級の子女たちの学校だったのも事実です。ですから、華族女学校ができたときに、東洋英和のかんりの女子学生たちはそちらに移ります。そうした点でいえば、キリスト教女子教育というのは、後のイデオロギーとしての「良妻賢母」とは異なりますが、子供を育てるには賢い母がいる、またよき妻がいるという意味の良妻賢母の場としてあり、女性たちに志を立てることによって、女として新しい道が歩まれることを説いております。

文野の闘争といわれた明治という啓蒙の時代において、一方では「字を知る乞食」とののしられながらもキリスト教に入信していった者たちのなかにあつた一つのもは、近代日本をどうかたちで近代化するのか文明化するのかという課題であり、近代日本の質を問う場としてキリストにとらわれた者、イエスにとらわれた者たちです。ですから、彼らのなかには志としての信仰が非常に強くあります。その志は日本をいかなる国家としてつくっていくのかということでした。

そういう意味で、明治天皇の死に象徴される明治の終焉という時期に強い時代喪失感にとらわれた内村が、明治という時代をどのように総括し、新しく開かれる大正という時代をどのように見たかという点で志の展開を考えてみたいと思います。

彼は大正元年十月十日の『聖書之研究』百四十七号に「明治と大正」という論を寄せております。「明治の後に大正が来た。是れ当然の順序である。明治、之を積れば文明の治世である。而して我国の場合に於ては文明は泰西の文明であつた。主として其物質的文明であつた。物質的に日本を欧化することが明治の事業であつた。而して日本は著しく其事業に於て成功した。然し物質的文明だけでは国は立たない。殖産と工業と、軍備と法律との下には強き道義が無くてはならない。大正、之を積れば大なる正義である。而して明治の後に来たりし大正の時代に於て日本人は正義の建設に従事すべきである。日本国が此新たなる時代に於て要求する人物は伊藤博文公のやうなる大なる政治家又は古河市兵衛氏のやうなる大なる工業家ではない。ルーテルのやうなる大なる信仰家、カントのやうなる大なる倫理学者である。日本は大正年間に於て宗教的ならびに道徳的に偉大たるべきである。英国においてエリザベス女王の開明時代の後にミルトン、バイヤン等の清党時代の来たりしやうに、日本に於ても明治の開明時代の後に大正の大義の時代が来るべきである」。

ここで力説していることは、物質的なかたちで日本を欧化するという明治の事業は、ここで終わりを遂げたのであると位置づけ、大正を「大なる正義」の時代ととらえていることです。それは強き道義を確立する。道義によって国家をいかに立てるかという思いで明日の国家を見ております。こうしたことは以後内村の論説のなかの一貫した主張になります。

昭和二年二月の日記には、岩倉具視、伊藤博文らによる近代化を批判し、「基督教抜きの西洋文明を日本に輸入して、毒消し無しの毒物を日本に輸入したのである。斯んな人達を維新の功労者として崇めし日本国民は後に至りて其

不明を恥づる事であらう。日本人は今や精神的に死んだ民である」とありますが、こういう言い方のなかにもその問題が見てとれます。内村が精神なき文明の受容というものを改めて問うなかで、明治の時代喪失感、絶望から来る新しい時代というものに自己の立場を位置づけていることは、いま考えてみるとたいへん大事なことだと思えます。

明治の精神

では、明治の精神といわれるものはどのようにとらえたいのでしょうか。そうした点で見ると、内村鑑三を明治の精神というかたちで最も明確に位置づけたのは、保田与重郎という人物です。保田は日本浪漫派のリーダーとなり、戦後はそのことゆえに、ある点ではきちんと読まれないままに不当に人格的に抹殺された部分もある人物です。保田与重郎の「明治の精神」というのが昭和十二年に出ておりますが、彼は内村鑑三と岡倉天心を取り上げて、明治の精神を論じております。そのなかで明治の精神として内村鑑三の何をとらえたかという点、次のように言っています。

「内村鑑三の明治の偉観といふべき戦闘精神も、日本に沈積された正気の発した一つである」。

正気の発した一つとして内村鑑三の業績を称えております。「純粹に主義の人、しかもその「日本主義」は「世界のために」と云はれた日本である。彼はそのために所謂不敬事件をなし、日露戦役に非戦論を唱へ、排日法案に激憤した。アメリカ主義を排し、教会制度に攻撃の声を放ちつづけた」。

教会制度に攻撃の声を放ちつづけたというのは何か。キリスト教を受け入れた日本人というのは、パウロの時代に見られる最も古きキリスト教というキリストの精神を受け止めることによって、世界に改めてキリスト教のメッセージを発する場となりうると言っています。無教会のことをいいます。ここで注目すべきは、「日本に沈積された正気の発した一つである」というかたちで、明治の精神の代表者として内村をとらえたことです。

しかも、内村の作品を見えますと、正気という問題が非常に重要な鍵であることに気づきます。内村は第一高等学校の教師のときに「教育勸語」に最敬礼をしなかった。少し頭を下げたわけですが、それは皇帝礼拝というものに対しての心のわだかまりから来ております。いわゆる一高不敬事件です。一高不敬事件のときに彼を外から優しく見守った一人が嘉納治五郎でした。

そのため、この世において身の置き場もない状況になります。その時、京都に行き、そこで奥さんをなくすわけですが、『基督信徒の慰』という作品を書いております。それは明治二十六年に刊行されますが、その第五章に「貧に迫りし時」という章があります。そこでは「古代の英雄にして智に於ても徳に於ても遙かに汝に勝しものが汝の貧に勝る貧困を受けし時を思へ」というのがモチーフです。汝というのは内村自身のことです。お前以上に優れた人間たちが貧しき絶望に陥れられたときを思いながら、四面楚歌の状況で石つぶてを投げられ、日本国に身のおきどころのない自分自身の正気を訴えようとしている作品です。

その「貧に迫りし時」に取り上げたのが、大伝道者であり、新約聖書の「ローマ人への手紙」をはじめとした多くの作品を書いているパウロ、それからソクラテス、そして、藤田東湖であります。東湖につき「『之を文天祥の土窖に比すれば我が舎は則ち玉堂金屋なり、塵垢の爪に盈つる蟻虱の膚を侵すも未だ我正気に敵するに足らず』と勇みつつ、幽廬の中に沈吟せし藤田東湖を思へ」といっています。藤田東湖が牢獄に入れられたときの思いを思いながら、自らの苦境時代を東湖に身を擬することによって、内村は乗り越えようとしております。そして、「未だ正気に敵するに足らず」という言葉を東湖の中から引いて、その文を閉じております。

考えてみますと、この正気というのは、『広辞苑』などで見ますと、至公、至大、至正なる天地の気、あるいは正しい気風という言い方をしております。よみは「しようき」ではなくて、「せいき」です。正気というのはおおらかに正しい、公明な気力が満ち、また人間の正しい意気込み、あるいは気風のようなものです。こういう解釈をここで

えんえんとしなくても、皆さんたちはそういう部分についてはたいへん理解の深い方たちだろうと思います。正気というの人間の正しい意気、気風のようなものだろうと思います。

人間が正気（しょうき）か狂気かというときには、その人間個人の精神状態であるのに対して、正気（せいき）というのとは、その外部に満ちているある公明正大な気風とか意気込みみたいなものをいうのではないでしょうか。そういう点で見れば、内村という人物が青年時代に読書したものは『回天詩史』があり『新論』があります。文天祥は南宋の忠臣であり、元軍の包囲下で「正気の歌」をつくるわけですが、彼自身はその文天祥に心から引かれた部分があります。

藤田東湖は弘化二年に文天祥に和して『正気歌』をつくり、それが志士の愛唱歌になります。志士はまさに正気をつらぬかんとしたがゆえに、狂うことよって時代の先駆けになろうとしたその部分に最も引かれたのは内村であったと思います。藤田東湖の『正気歌』の中にある「天地正大の気、粹然として神州に鍾る。秀でては不二の嶽となり、巍々として千秋に聳ゆ。注いでは大瀛の水となり、洋々として八洲を環る。發いては万朶の桜となり、衆芳與に儔ひ難し。凝りては百鍊の鉄となり、鋭利鑿（かぶと）を断つべし。……正氣時に光を放つ」というところは、内村自身が東湖を書くときの彼の心情のなかに最も根強くあつたものだということが言えます。

内村のその部分を最も鋭く見抜いていたのは保田与重郎でしょうけれども、内村が天地正大の気といったのは、ある絶対的なるものみみたいなもの、絶対的なる公明正大な気のようなものを一方で見ながら、そういうものに向かうことよって自らの内面的なものを飛躍させていくことよって、彼は明治という時代と鋭く対峙しえたのです。それは神といえますか、ある絶対的なるものを正気という思いに込めていたと言ってもいいのではないのでしょうか。

ですから、正気をもつことよって、時代の志士たちは狂に徹し、時代の先駆けとして倒幕運動に参加していったのです。吉田松陰という人物に最も年代的に近いのは同志社をつくった新島襄というクリスチャンですが、彼

が日本を密出国をしてアメリカに行くときも、まさにそれは狂気の決断にほかなりません。その決断は、彼の中に置いてまさに正気にながされてのことでした。

吉田松陰は一八三〇年生まれで、内村は一八六一年ですが、この三十一歳の年齢の差以上に、内村自身は吉田松陰に非常に強く心理的には親しい関係をもっていたと思います。その親しい関係とは何であるかという点、松陰が志によつて時代を生きようとした。そして、新しい時代をそこでつかみたいと思つた志において共通していたことにより、まず。

では、松陰とは一体何者であるのかということになりますけれども、松陰は藩邸から脱出して、それ以降松陰の狂気が始まるわけですが、そのなかにあるのは友との約束を守るといふかたちでの出会いでした。そうした部分を見てもみますと、内村自身は、キリスト者として、イエスとの出会いというものの、文明の宗教としてのキリスト教ではなくて、志としての信仰のようなものに非常に強く引かれていたと思います。

彼は昭和三年に「武士道と基督教」という一文で明治の自らの世代を総括しております。そのなかで「武士の魂をキリストに捧げて日本の教化を誓つたのである。そこに朝日に匂ふ山桜の香りがあつた」という言い方でいっております。あるいは、「イエスの武士物質（かたぎ）に牽かされて其従僕と成つたのであります。教養や信仰箇条は彼等に取り後の問題でありました。彼らは孰れも先づイエスの武士らしき人格に憧憬したのであります」。

この思いは、自分だけではなくて、たとえば同志社をつくつた新島襄、あるいは、新島のそばにいて後に大阪の梅花女学校の創立者となつた沢山保羅という人物、武士階級でクリスチャンになつた人たちを挙げながら、それはイエスの武士的気質に引かれてなつたのだという言い方をしております。実はこの点が明治のキリスト者を考えるうえで大事な問題になります。

志としての信仰

これは内村だけではなくて、たとえば東北出身士族たち、仙台藩の連中が函館に行き、ニコライのもとでハリストス正教会に入信をします。そして、東北を中心とした伝道をします。ロシア正教といわれるハリストス正教会というのは、日本の教会のなかでは今はあまり大きな力をもっておりませんが、明治にはたいへん大きな力をもっていました。これは仙台藩士たちが入信したこととかわりません。

その時に入信した仙台藩士は、同藩の者に、「国家の改新は人心の改造によりせざるべからず。人心の改造は宗教の改革よりせざるべからず。宗教の改革はキリスト教をもつてせざるべからず。」と言つてよびかけています。新しい国家をつくるためには新しい国家にふさわしい精神の器が要る。その精神の器としてキリスト教があるし、そうした意味において日本の真の国家改造をやるために、キリストチャンになるべく函館に來いと説いたわけです。国家的課題からの入信というものが明治のキリストチャンの中に非常に強くあつたのであります。それだけに、人心の改造、信仰の内面化をどうしていくのかというのが、内村が問い続けた課題だつたわけです。

ちなみにいいますと、農村地域でキリスト教に入つた家というのはしばしば「あの家はかまどをこぼつ」と言われております。それは非常に山師的氣質の連中が入つてくる。何か大きなことをなそうという連中。養蚕製糸業というのは非常に山師的な商売ですから、そういう投機的冒險商人が多分に入つております。そうした飛躍と決断をなさしめたものの一つとして、明治の精神という問題が主として結びつけられなければなりません。

内村はこのへんのところを後にたいへん明確に述べます。大正九年の日記を見てみますと、こういうことを言っています。「我等の殿様はキリストであつて、我等は皆彼の家来である」。殿様はキリストだとかたちでとらえています。「家来は殿様に由て一致し、殿様の為に働くのである。願う此フレンドシップ（友誼）も亦殿様の栄光に帰せ

ん事を」。われらの殿様はキリストでわれらは皆彼の家来であるという言い方のなかに、内村の志としての信仰が読みとれます。

志としての信仰をこういうかたちで位置づけてきた内村が、日本人とキリスト教というものをどうとらえたかという点、「基督信者と日本人」という論説のなかでこう言っております。

「今や珍しき者は基督信者でない、日本人である。基督信者はいくらでもある、無い者は日本人である。正直なる忠実なる、義理を重じ、道を行つて誤らざる日本特有の男女である。そして、是ありて真の基督信者が有るのである。真の日本人をなくして日本に於て真の基督信者が無い。ナタナエルは「真のイスラエル人にして其心に詭譎（いつわり）なき者であつた。パウロは「ヘブル人中のヘブル人であつた。故に真の基督信者であり得た。生粋のドイツ人たるルーテルがドイツが産せし最大最善の基督信者であつた。其国を愛し、其国の特性を帯びざる者にして善き基督信者と成つた例はない。非日本的にして善き真の基督信者であり得やう筈がない。日本人たるの道を知らざる日本人がいかでキリストの真の弟子であり得やう。日本人たるを嫌ひ、米国人や英国人に真似んと欲する日本人は日本国の叛逆者であつてキリストの敵である」と、かなりラジカルなことを言っています。

ここでいう「正直にして忠実、義理を重んじ道を行つて誤らざる日本特有の男女」というのが彼の日本人像であり、また、そういうものをより高めるのが、彼にとつてみるとイエスの福音であり、十字架の贖罪という信仰であるという思いです。民族の子であることを徹底することを通して、民族の理想と道義性と活力を生み出す場として、キリストにとらわれた。これが明治のキリスト者であり、内村鑑三ではなかつたかと思えます。

そして、このような思いこそは、現実の明治国家あるいは日本国家というものを相対化する目を彼にもたらしめます。だから、日本人たるの道というのは、私は日本人として師弟の信義を重んずるというかたちで徹することによって、日本の現実の秩序を相対化しえたところに、内村の強き批判精神が生まれてきたと言えるように考えます。

信義としての信仰というものを見てみますと、彼の若き日のノートにはおもしろい、いろいろなメモが残っております。彼のノートは現在、北海道大学の内村文庫に寄贈されていますが、「一八八二年札幌リテラリーノート」という読書ノートの中に、まず神風連の歌を引いて、「国ノ為メ鎮台兵ヲ打ハラヒ、大江村ニテ腹切りニケリ」と書いております。

また、「太平記」から大塔宮熊野落ちの引用をして、義に準じたる悲運に対しての共鳴もしております。

また、昭和三年ごろ読んだと思われる書物に、蜷川新が書いた『維新前後の政争と小栗上野の死』という本があります。内村という人は、傍線を引つ張り、感想文をいろいろ書きこみます。英語で書いた部分もあれば、丸をつけて書いているものもあります。蜷川さんが小栗上野介の問題で勝海舟のことを「知あれど義なし」と評価したところに傍線を引いて「痛快」と書きこんでます。だから、勝のような人物というのは「知あれど義なし」というかたちで、内村にとっては評価すべき人物ではなかったわけです。こういうかたちでの「義」への傾倒が強くなりました。

また、京都時代というのは一八九七年から一九〇七年ですが、京都時代の備忘録を見てみますと、「人道の無欲は義あることを知りて利を知らず、公義に従て私心なきを無欲とす。取るべき義あれば取り、与うべき義あれば与え、蓄うべき義あれば蓄え、施すべき義あれば施す。只心の義に随て無欲とし利に依るを欲とするなり」と、義というものを理解しております。

ですから、彼は観念としての信仰ではなくて、イエスが十字架にかかって人間の罪を負い死んだという十字架の信仰を、まさに信義の問題として、また正気の問題としてとらえていたということが言えます。それであるがゆえに、正気という場から照らしたときに、現実の明治国家が持っていた国家の施策というものを相対化して見えるわけで、それを撃つべき場を彼のなかにきづいていき、最も鋭い批判精神をもつことができたと言えましょう。

それだけに、彼の中にある正気、そしてそれをキリスト教の信仰というかたちで高めていくことで、彼は国民の道

徳的覚醒というものを求めたのだらうと思います。

明治と大正という問題のなかで言った、明治とは何であるかという点、後に山県有朋の問題でも述べているわけですが、山県公の死によって明治という時代は終わった、ああいう国家のつくり方は終わり、これから新しい時代をつくらなければならぬという言い方をしています。それはどういうことかという点、山県の場合でいえば、主権戦論と利益戦論というかたちで、国境の主権性を守るには国を接する他国を利益戦として確保するのだという主張に表われている大國論的な系譜になります。それに対して内村が主張したのは、国家というものは道義によって成り立つので、民族の道徳性が高ければ国家として大たりうるのだという小國論の系譜だらうと思います。

明治という時代を生きた人たちは、圧倒的な欧米列強の武力的な力の前に非常に強き攘夷の精神というかたちでの民族心をもっています。その攘夷の精神のようなものに支えられ、それが激発してくるときに、欧米流のキリスト教に対する反発として、内村にとってみれば無教会という主張になるし、日本の教会は常に自給独立を觀念として主張していくことになります。

内村は、日本民族がこの時代のなかでどのような民族としての明日を切り開くかというときに、イエスに出会うことにより、イエスの死というものを通して正氣という問題にぶつかり、まさに愛国と攘夷の結晶したようなものとして彼の信仰はあつたといえます。

そして、いまの日本人が問うべきは、明治天皇が亡くなられたとき、時代を失ったというなかにおいてどのような時代像を模索したかという意味で、もう一度明治のキリスト者たちの言葉を考えてみる必要があるのではないのでしょうか。それは、明治という時代が駆け足で文明化してくるときに、欧米の物質的な文明としての国家の枠組みはつくったけれども、志という面において、いかなるかたちで日本民族が覚醒し、新しい時代にその道義力を發揮しうるかどうかということに対する不安があるからこそ、大正は道義の時代であり、正義の時代だと彼は言わざるをえなか

ったのではないでしょうか。そして、彼の書物が多くの人たちに読まれた一つは、国家というものは民族の道義力によつて歴史が滅び、あるいは興るのだという「興国史論」のなかで書いてある歴史認識とかかわっているように思います。

それらのことは、内村が松陰に非常に魅せられていた、松陰が時代を切りひらこうとした正気の志を一身に引き受けることで明治という時代を生きようとした思いにつながります。それだけに明治天皇が亡くなられたときの時代喪失感と共に、暗黒の中から新しい時代を切り開くとするならば、失われた道義力をいかに回復するのかわという問題が内村の大きな課題としてあり、明治のキリスト者としての彼の生き方を後に規定していったのです。

そうした点でいえば、明治のキリスト者は物質的な文明化としての近代の闇を打ち続けるその一つの示唆を、キリストは殿様であり、われらはその従僕だという意識でとらえてきた信仰の目を高く掲げることよつて、打ち出したといえましょう。

こういう明治のクリスチャンたちのもつていた精神的な強さというものを振り返ってみるときにいつも思うのですが、いま一番問ひ直すべきは、新島襄にしても内村鑑三にしても、あるいは植村正久にしても、藤田東湖がある時代のなかで激発した「正気歌」のような、正気といった外側にある絶対的なあるものと自己の内面にある緊張関係をもつことよつて時代を相対化していく目のように思います。

そして、内村にとっては、イエスにとられた信仰によつて、開かれた心が正気に至り、見る目は現実国家がもつている不義、不正というものを撃つ目になってきていることです。それは、当時の人から見れば、狂気に見えるでしょうけれども、彼にとつては正気は絶対的な神、救済者としてのイエスにつながっていくわけです。そこから見た覚めた目というものがいまいちはん求められないでしょうか。

実は私たちは国家とか日本国という言葉に埋没することよつて、国家とか日本国とか日本人というものの自体を見

つめる場を失っているのではないでしょうか。日本の道とは何かといわれたときに、内村が言ったような正直にして義に厚くというかたちでもう一度読み直してみることが、決して無駄なことではないように思います。そして、正気が非常に観念的に語られることによって、東湖が東湖の時代になぜ正気というかたちで自らの心のたけを訴えたかという緊張感のないままに読まれている部分もあるのではないのでしょうか。

明治のキリスト者のもっていた時代との緊張感と、明治という時代が文明化というなかで失った正しき一つの姿。それをあるときは内村は「朝日におう山桜」というかたちで言っております。こういう問題こそがいまいちばん考えねばならない時のように思う次第であります。

この課題は、戦後の問題でいえば、内村の弟子で、東京帝国大学を昭和十二年に追放になり、後に第二代東大総長となった矢内原忠雄が、終戦直後に「日本精神への反省」と題する最初の講演をしたなかにひきつがれております。「日本精神と平和国家」を説く矢内原は、昭和二十一年正月の日記に、自分の家の周りで国旗を立てる家はない、しかし、いまだからこそ自分は国旗を立てるのだという思いを記し、「日本人の国家観念について疑なきを得ず」と言っております。日本精神を論じ、「日本の傷を医す者」は何かと問いかけるなかで、矢内原は本居宣長を論じ、日本人が減じた日本をもう一度自分の目でとらえ直してみることが、とくにクリスチャンであるということの足元を見つめるうえにおいても大事だということを言っているのです。

そうした点で見ますと、松陰と新島襄、それから内村、そして矢内原の戦後のいろいろな活動の基底にあるのは、まさに日本を日本として直視し、それを信仰の目において、つまり、古き日本の言葉でいえば正気的心でもって読み直していくなかで、日本が何を失っているのかを問い直す作業だったのだらうと思います。

戦後のキリスト教界というか、日本のキリスト教の歴史のなかではそういう視点はかなり失われています。それはキリスト教だけが足元を見失っているのではなくて、宗教界自体がそういう部分において存外意識が希薄になってい

ることとかかわっているのではないでしょうか。

明治のキリスト者が邪教と言われたキリスト教になぜとらわれたのか。そして、どういう日本をつくろうとしたのかというときに、彼らは民族の子として最も忠実に日本を直視し、日本の現実政治に対して異端であり狂と言われながら、最も鋭き批判精神をもっていた人間がいたことのゆえに、明治という時代の危ういバランスもそれなりに保たれていた部分があったといえましょう。

しかし、現実は大正から昭和という時代のなかにおいて、大正は「大なる正義」の時代をつくるべきだし、そういう意味では道義を確立すべきだといわれながら、その部分が失われていったところに、時代と民族の精神の緊張関係が減びていった問題も一面ではあるように思います。

おわりに

今日は明治のキリスト者たちもついていた精神のある部分を紹介させていただいたわけですが、そういう面からもう一度日本の私たちの先人たちが残してくれた遺産、心の深さみたいなものを問い直してみることは、私たちがいま立たされている足場を固める作業にもなるだろうと考えて、そんなお話をさせていただいたわけです。

改めて内村のものを読み、保田のものにふれながら正気という問題を考えていくと、「正気歌」を文天祥が読み、東湖がうたい、そして吉田松陰が口ずさんだほどに、激変の時代に己の立つべき場を求めたほどの緊張感覚のないままに言葉だけが独り歩きしていることが、どんなにその詩の意味を失わせているかということ、一方では強く実感もしました。

明治のキリスト者たちのもつていた精神の深みというものは、全くそういう世界とは異なる立場から思想形成をした保田と重郎自身が鋭く見つめたほど、後の日本のキリスト教界のなかではあまり読み取られていなかったというの

が、日本のキリスト教界の悲劇でありましょう。それだけに内村のもっていた強き愛国心の深さの一端でも、もう一度皆さんたちにお考えいただければ幸いです。

私たちが負っている一つのしこりみたいなものは、もう一度直視したときに時代が見えてくる目が出てきましよう。明治維新という激変の時代のなかで明治という一つの革命をなし遂げ、そこで精神形成をやった明治のキリスト者たちがそれなりに時代における存在感をもっていたのは、まさに母文化というものと鋭く切り結びながら、民族の血の中に何を受け入れるかということを必死で模索したからにはほかなりません。私たちは、民族の血などというと、とんでもない話みたいに思いがちですが、その根本のところはあまり直視しないままに、そんなことを言っているあたりが、いまいちばん問われているように思えます。

たいへん粗っぽい話ですけれども、明治キリスト者もっていた精神的な世界の持つている深さといえますか、彼らが常に対決し、対話し、自らの精神覚醒をどんな場でしたのかという点について、何か考える素材になればと思ってお話した次第であります。どうもご清聴ありがとうございました。